JCAS次世代ワークショップ報告書

交歓と境界：東ユーラシア、モンゴルとテュルクにおける宴会、酒、ことばをめぐって

開催日時：2018年2月17日（土）12:50～　会場：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

【プログラム】

セッション１：現代モンゴル・テュルクの宴

寺尾萌（首都大学東京大学院）

モンゴルの宴と交歓―婚姻儀礼における両家訪問を事例として

吉田世津子（四国学院大学）

「新しい時代」の宴―クルグズスタンの結婚披露宴に見る世代と変化

セッション２：宴にみえる文化的境界

伊賀上菜穂（中央大学）

ブリヤート共和国ロシア人古儀式派教徒の追善供養と酒

阿部朋恒（首都大学東京大学院）

中国雲南省のハニ族における儀礼と食の変容

セッション３：会話と境界

中村瑞希（筑波大学大学院）

日常と非日常をへだてる言語―ウズベク人社会における二言語使用を事例に

堀田あゆみ（学振特別研究員PD）
“歓待”の舞台装置としてのゲル―モンゴル遊牧社会における他家訪問の事例から

コメンテータ

三浦哲也（育英短期大学）／風戸真理（北星学園大学）

櫻間瑛（学振特別研究員PD）

【実施報告】　当日は、各発表者からの報告に続いてコメンテータによるコメント、そして総合討論を行った。３セッションを通して見出された課題として、歓待の原理とその運用（交歓）における東ユーラシア的特徴と、そこにおける酒（ウォッカ）の役割、そして宗教やジェンダー等の文化的社会的属性からみた交歓のあり方の差異などが指摘された。それらの論点について、本企画を構成する諸地域・文化間における差異と共通点の双方から議論を行った。

饗応における競合的な見立てなど、テュルクとモンゴルの交歓のあり方における共通点が、寺尾報告・吉田報告の間にみられるほか、中村報告・堀田報告から明らかになったような言語的・非言語的情報の提供と読解、すなわち「観察」に注目して議論が展開した。観察によって社会的境界を見定め、他者に相対しているという、テュルクとモンゴルに共通する身構えが指摘された。阿部報告の調査地である中国少数民族の身構えとの差異も示された。

伊賀上報告・堀田報告からは、旧ソ連的特徴として、ウォッカを指標とした社会関係の表現を見出すことができた。また、古儀式派教徒、イスラーム教徒の酒によらない宴の流行の動向にも共通点にも話題が及んだ。その一方で「中心」であるロシアに比して、その周辺諸地域では、ウオッカがより高い贈答的な価値をもつ可能性も指摘された。

最後に、本企画の今後の展開として、成果出版に向けての提言と、文化人類学会課題研究懇談会として平成30年度から活動を行う予定の「歓待の人類学」への参加の呼びかけをおこない、さらなる研究の発展へ向けた方針を確認した。

（参加者：35名）